



エイズ孤児たちの未来を切り拓く力を支えたい

特定非営利活動エイズ孤児支援 NGO・PLAS 代表理事 門田 瑠衣子

約 1,780 万人のエイズ孤児のために

現在世界には、エイズ孤児といわれる「エイズによって片親ないし両親を失った 18 歳未満の子どもたち」が、約 1,780 万人いるといわれています。わたしたち特定非営利活動エイズ孤児支援 NGO・PLAS（プラス）は、そうしたエイズによって影響を受ける子どもたちが未来を切り拓くことができるよう、活動する NGO です。

設立は 2005 年 12 月。ウガンダやその他アフリカ、アジア諸国を訪れたボランティアメンバーを中心に、日本で初めてのエイズ孤児支援に特化した団体として、発足しました。

現在は、アフリカのケニア共和国とウガンダ共和国にて、活動を行っています。活動では、現地の住民とともに草の根で活動し、最終的には現地の人たちだけで活動が続けられるような自立性を大切にしています。

生計向上とキャリアカウンセリング

例えば、ウガンダでは、夫がエイズで亡くなりシングルマザーとなった女性と、その子どもたちを支えるために、家庭の生計向上と、それによる子どもたちの就学を目指す事業を展開しています。また、子どもたちが就学したその先に、子どもたちが夢を持ち実現する力をつけることができるよう、母子へのキャリアカウンセリング



ウガンダにて支援を受けるシングルマザーと子どもたち

を行っています。

この事業では、家庭の「生計向上」を目指し、シングルマザーたちが小さなビジネスを立ち上げ、自分たちでそれを運営していくことができるように支援をします。例えば、ウガンダのルウェロ県では「カフェ」を村の中で立ち上げました。カフェ運営のための調理研修や会計、マーケティング研修をはじめ、さまざまな研修とフォローアップを提供しています。カフェではジュースやサンドイッチなどを提供。ママたちはスキルアップと経験を積みながら、子どもたちのために懸命に働いています。

生計が向上し安定することによって、継続的に子どもたちを学校に通わせることができるようになります。一方で、就学の延長線上に子どもたちがどう未来を描くか、という問題があります。失業率が高い現地では就職は容易ではありませんし、エイズ孤児の子どもたちは困難な家庭環境から将来を描くこと自体が難しいケースもあるのです。その理由は、モデルケースとなる人が周りにいない、ということも大きいと思います。「エイズ孤児」への差別や偏見も根強い地域の中で、どのような将来があるのか、モデルになるような人が地域におらず、母子ともに「どんな未来が待っているのだろうか？」と漠然とした不安を抱えることがあるのです。そこで、プラスでは母子へのキャリアカウンセリングを行っています。カウンセラーを育成し、個別の家庭訪問を継続的に行うとともに、子どもたちのやりたいことを引き出したり、そのために保護者がどのような準備をするといいのか、また現実的に準備できることは何なのかなど、多岐にわたる相談を行って

MAR7 ADHIAMBO.



キャリアカウンセリングの一環として、将来の夢を描くワークショップ



います。子どもの発達についての情報を持っていない母親も多く、カウンセリングを受けるシングルマザーたちを集めて、子どもの発達や学習についての基礎講座を行うこともしています。

現地パートナーとともに活動する際に大切にしていること

これらの活動を展開するにあたり、特徴的なことの1つは、現地パートナー団体とともに活動を立案し、展開、事業評価を行っている点です。現地の信頼できる NGO や CBO (Community Based Organization) を発掘し、共に現地調査を実施。互いの団体のミッションやビジョンの交差するところで課題を設定し、事業を立案、実施しています。

現地パートナーと事業を共同実施する一番の理由は、「事業の成果を最大化できる」と考えているからです。私たちは住民とともに草の根で活動し、自立を目指すアプローチをとっているため、現地パートナーの存在が必要不可欠であり、彼らの成長や彼ら自身の手による事業運営が、そのカギとなると考えています。

また連携の際には、3つの点を大切にしています。

まず1つ目は、パートナー団体の自立と成長を促すことができる活動であるか、またそのようなコミュニケーションをとれているかということです。長期的な依存関係とならないように注意をしているのです。

2つ目に、お互いの強みを生かし、現地の人々による問題解決を促すようにしています。私たちの強みは事業計画や資金調達の戦略性です。一方で現地パートナーの強みは、現地の状況や受益者に対する深い理解とコミュニケーションにあります。2者が連携することで、地域課題に対する問題構造にアプローチし、単に表面的な状況を改善するのではなく、より根本的で根源的な状況の



現地パートナーとともに中期ビジョンを策定

改善と、それが現地によって継続することを目指しています。

3つ目に、対等な関係と相互の意思を尊重したパートナー関係を目指しています。

近年、注目される「働き方」

組織内に目を向けてみると、働き方にも特色があり、注目されることが増えています。2016年には「NGO 組織強化大賞」にて大賞を受賞しました。クラウド型データベースをはじめとしたテクノロジーの活用による業務効率化、また、テレワークの導入等により誰もが働きやすい組織を目指しています。テレワークは、職員のみならずインターン生も実施可能となっており、必要に応じて全スタッフが臨機応変に活用しています。こうした「働き方」への取り組みが、組織力を高め、ひいては現地事業の成果へとつながっていくのです。

今後に向けて 社会的インパクト評価を測る

現在、わたしたちが力を入れてチャレンジしていることは、社会的インパクトをどのように測っていくのか、という点です。

近年、社会的インパクト評価の重要性はますます高まっています。ドナーに対する説明責任を果たすため、また、活動の改善点を見つけ、場合によってはドラステックに事業を見直していくために、社会的インパクト評価は必須であると考えています。そこで、団体のミッションやビジョンから落とし込んだ目標を「アウトカム」に整理して、中期的に測定していくとともに、各活動のアウトプットレベルの指標も定期的にモニタリングしています。組織内で納得感のある指標をつくることは大変でしたが、これらをつくる過程で、団体のビジョンを見つめ直し、各スタッフや支えてくれる方々の想いを確認することができました。

わたしたちは現地の人々とともに活動し、子どもたちが未来を切り拓く社会を実現することができるよう、これからも活動を続けていきます。ウェブサイトや Facebook 等で活動について随時報告していますので、ぜひチェックしてみてください。

特定非営利活動エイズ孤児支援 NGO・PLAS
URL : <http://www.plas-aids.org/>